

パソナリテイ障害

井上和臣

鳴門教育大学教育臨床講座

パソナリテイ障害の認知療法 (cognitive therapy) において治療関係が重視されることは当然であるが、これから紹介する「回避性パソナリテイ障害に対するベックの認知療法」¹⁾では、治療技法に焦点を当てる形で治療の実際が提示されている。患者のかかえる問題に積極的に取り組んでいくことで問題解決が促進されるなら、それが治療関係にも好ましい影響を与えるはずだからである。

ここに登場するオードリイという名の女性は、第Ⅰ軸診断は全般性不安障害と大うつ病性障害であったが、回避性パソナリテイの特徴が顕著な混合性パソナリテイ障害という第Ⅱ軸診断が下されていた。ベックによる治療は、

別の治療者によって第Ⅰ軸の問題が消退し、パソナリテイ障害という患者の基礎的構造が明らかになってきた時点で実施された。オードリイは自分の能力以下の仕事に従事し、他人から否定的な評価を受けそうな状況を避けてきた女性である。

非機能的信念の同定

面接はベックが、「最近はどうなことで困っているのか話していただけませんか？」と尋ねるところから始まる。強い不安があり、いつもより頻繁に前の治療者と接触していた、と答えるオードリイに、ベックは「不安はどうな状況でよく見られたのですか？」と尋ねる。オード

リイは最近の旅行について語り始める(以下、会話文のAはオードリイ、Bはベック)。

A…私が入っていくと、急にみんなの話題が変わって、低所得者層が住む地域の話題になったりするので。

B…話題が変わったとき、どんなふうに感じましたか？

A…「ほら、また始まった」という感じです。「私は人間としてではなく、物扱いされる」のです。

最近の困惑についてまず尋ねることで、治療者は患者のかかえる問題への関心を伝える。不安について語るなかで、患者の信念 (belief) が明らかになる。ここでは「私は人間としてではなく、物扱いされる」という信念である。

B…物扱いされるといふ思いは、これまでにもあったのじゃないか。人間として接して欲しいという感じをはじめて覚えたのはいつでしたか？

オードリイは小さい頃から家庭で冷遇されていたと語る。皮膚の色が少し黒かったため、まるで召し使いのように扱われてきたという。

B…召し使いのような扱ひを受けたことに関連して、何か思い出す出来事がありますか？

オードリイは夕食時、四歳年上の姉は口をきいてもよかつたのに、自分は話すことを許してもらえなかつたと語る。

B・・・お姉さんは話せたのに、あなたは話すのを禁じられていたことを、あなたはどんなふう
に解釈したのですか？

オードリイはまず姉との年齢差を考えた。それから、姉が最初のアフリカ系アメリカ人として入学を許された有名校に自分も入学すれば、周囲の待遇も変わるだろうと考えていた。ところが、何も変わらなかった。さらに大学に進んだ姉は再び話題になった。オードリイも別の有名大学に進学したが、姉との違いは残ったままだった。

B・・・小さい頃から家庭で経験したことは、今あなたがあなた自身やあなたに対する他人の見方について考えることに、どう影響していると思いますか？

A・・・私が何を言っても、何をやりとげても、私のことや私がなすべきことについて、非常に固定した見方をする人がいると思うようになりました。他人の見方について何とかしようとしても無力感を覚えるだけでした。そんな状況から完全に身をひいてしまっしかなかったのです。

患者の信念に関連して、児童期の体験にまで遡って、このように信念の来歴を問うという方法は、うつ病やパニック障害に対する標準的な認知療法では行われなかったことである。もちろん議論はあくまで過去の出来事を患者がどう

解釈するかに集中していくわけだが、これはパ
ーソナリティ障害を対象としたときの認知療法
の大きな特徴である。

B・・・人間として接してもらえたと感じられ、心地よさを覚えた状況はありませんでしたか？
苦労して築きあげた親密な人間関係に再び
話した後、オードリイはこう続ける。

A・・・私には信じられないのです。少しは人並みに扱ってくれる人はいましたが、それも私を利用しようとしただけで、目標を達成すると、私から遠ざかっていきます。裏切られたという
感じだけが残るのです。

「人は私を物扱いする」という信念以外にも、「人は信用ならない」「人は私を利用するだけであって、結局は私を裏切る」という信念がオードリイには認められる。認知療法では自動思考(automatic thought)とスキーマ(schema)・信念という認知が区別されるが、パーソナリティ障害を対象とするときには、信念を把握する作業が重要になってくる。「注意をこらしているも、人は私を傷つけるでしょう」というオードリイの言葉から、話題は彼女を襲ったレイプに及び、次いで所属するキリスト教会での出来事に移る。有色人種を差別しないはずの会派であるにもかかわらず、教会では彼女の考えは顧みられなかった。意見すら求められなかったという。「私を思慮深い人間とは思っていないの

でしょう」とオードリイは語る。

B・・・あなたには他人があなたを見る見方に関して独特な信念があり、その一方で、あなたの不安は最近強まってきているわけですが、信念と不安とのあいだにはどんな関連がありますか？

オードリイはこれに答えて、「私には自分を主張することや人とコミュニケーションをとることが非常にむずかしいのです。たとえ私が何かを話したとしても、ただ軽蔑されるだけでした」と語る。

B・・・お話をまとめてみましょう。他人とかかわる状況に入ってしまったとき、あなたは無視され、隅のほうに押しやられ、意見を求められることもない。自分を主張しても、つらく当たられるだけで、それであなたは不安になる。そう考えてよろしいですか？

オードリイは「他人は私につらく当たるか、無視するか、何か言っても、言う前よりむしろ気持ちにさせるだけです」と応じる。

B・・・ところで、あなたはご自分を二流の人間で、人より劣っていて、召し使いのような存在だと考えていますか？

オードリイはこれに対し、「他人とつきあうという点に関しては、私にできることは何もありません。まるで出口のない場所に追い込まれたようです。でも、私は勉学やテストの点では

まったく二流ではないのです」と応じた後、さらに続けて言う。

A…これまで何人も人と何年もいつしよに働いてきましたが、みんな私が死んだらいいと思っている人ばかりで。やり場のない気持ち私を押し殺してきました。すべてがうまくいっているように見せかけてきました。人は私に『笑顔を見せて』と言います。そんな気になれないと言うと、人は気分を害するのです。彼らが怒り出すのではないかと私は心配になります。

非機能的信念の検討

B…あなたの信念について見ていきましょう。それらが現実を適切に反映したのか、少し極端で絶対的などころがないか、をです。最初に、「人は私を二流の人間のように扱う」という信念を検討しましょう。その信念が適切であることを示す根拠として、どんなことがありますか？

信念を把握できれば、次にその根拠 (evidence) について問う。信念が長く強固に維持されるのは、それを支持する根拠が多くあると考えられているからで、患者にはこの問いに答えるのは容易なはずである。患者の信念を最初から否定することは避ける必要がある。パーソナリティ障害の場合、信念を否定することがそ

の人を否定することと同義になりかねない。その意味で、信念を支持する根拠を先に問うことが勧められる。

オードリイは父親の態度を例に挙げて話す。父親は「おまえなど生きても死んでも気にならない」と言ったというのである。また、職場の上司の例として、「君はカウンセリングを受けるべきだ」と、まるで彼女が変だと言わんばかりの態度をとったことが述べられる。

B…「人は私を二流の人間のように扱う」というあなたの信念と矛盾するような事柄がありますか？

オードリイは、「これはある点では矛盾するけれど、ある点では信念の正しさを示すことになるかもしれない」と前置きして、ニュージールランドに旅行したときの話を挙げた。ある男性がとてもゆっくりと話すので、いらいらしたというのである。それで、自分がY大学の卒業生であると告げると、とたんに重要人物に話すような口調になったという。

B…つまり、はじめは物扱いされていたのに、あなたの資格について証明すると、人間として対応されたというわけですね。ところで、そんなふうにあなたを人間として応対してくれた人がありますか？

オードリイは前の治療者Cの名前を挙げる。その一方で、過去の治療者とのあいだでは不倫

的な経験も多かったと述べる。ベックはCの他にも、適切に接してくれた人の例を挙げるよう促す。シアトルに在住する友人が思い浮かぶ。しかし、レイブ事件の後は、元に戻ってしまつたと語る。

B…あなたが心にかけている人たちについて、一人の人間としてあなたに接してくれる場合とそうでない場合の違いはどこにありますか？

A…私が心にかけている人たちも、本当のところは私を人扱いしてくれないのです。

オードリイは母親と姉の例を挙げて語る。母親は姉を心底愛しているが、姉はオードリイを馬鹿呼ばわりするのだった。

B…あなたが心にかけている人たちでさえ、あなたを人間と思っていない、というのですね。それとも、あなたが望むようにはあなたを見てくれないのですか？ あなたをまったく無視するかどうか？ あるいは、扱いにいくつかの段階がありそうですか？

オードリイは扱いに濃淡のあることを認める。姉は彼女の様子を気づかって人には尋ねてくれるようなのだ。ところが、面と向かうと、けなしてばかりいるのである。

A…まったく私を一人の人間と思っていないから、他人に私の様子を尋ねたりはしないでしよう。でも、十分に私を人間と認めてくれて

いれば、これまで私に直接やってきたようなことはしなかったでしょう。

B…人は変わりうるものだとは思いませんか？ これまでいろいろなことをしてきたお姉さんは過去のお姉さんであって、今はまた違ってきているとは思いませんか？

A…私も前はもう少し楽観的だったのですが、でも、だんだんそうじゃなくなってきました。

ホームワーク

B…次回までに「召し使いのように人は私を見ていない」というあなたの信念と矛盾する事実がないか調べてきてほしいのです。「人は信用できない」という信念についても、反証がないかどうか調べてきてください。

認知療法は患者の考える力を信頼する治療法と言える。課題について考えをめぐらすなかで解決の糸口は見えてくるはずである。ホームワ

ークとして、オードリイは信念に対する反証を探すことになった。

B…毎日の生活で、どんなことが起こっているかを見てほしいのです。反証が見つかるかもしれない。敬意をもって接してくれる人がいるはず。そうではない人もいるでしょうが、そんな人はどうでもよいのです。とにかく確かめてみましょう。それから、次回はあなたの子どもの頃に話題を移したいので、そうしたいかどうか考えておいてください。

ベックは今日のセッションについてオードリイの意見を求める。彼女は「私は絶望的な患者ではないか」と語る。ベックは治療によって変化した点に注目するよう促し、「まだ目的地に着いていないとしても、それは目的地に向かっていないことにはならないでしょう」と応じる。再びベックは「今日のセッションについてどんなふうに感じるか」と尋ねる。オード

リイは緊張して震えていたことを告白する。「ひどくこたえることをベックが言うのではないか」と恐れていたのである。ベックは次回セッションで傷つきやすさを取り上げることができた。

(本稿は日本行動療法学会第二三回研修会における「パーソナリティ障害の認知行動療法」に加筆修正を行ったものである。)

[引用文献]

(一) Aaron T. Beck: *Cognitive Therapy of an avoidant Personality (2nd ed)*. Guilford Press, 1990.

[参考文献]

アーロン・T・ベック、アーサー・フリーマン(井上和臣、岩重達也、南川節子、河瀬雅紀訳)「人格障害の認知療法」岩崎学術出版社、一九九七年

(いのうえ・かずおみ／精神医学)